

## シベリア抑留の思い出

愛知県 山田芳雄

昭和二十（一九四五）年三月二十日付きにて伊林の独工十二連隊より関東軍建設兵団へ転属を命ぜられ、三月十五日入隊の新兵さんとはわずか五日間にてお別れしました。吉林省の下九台の工作大隊本部下士官を二カ月勤務して九站の連隊本部の乙書記を三カ月務めました。ソ連の不法参戦を知り通化近くの海竜にて終戦となり武装解除を受け、愛する軍刀とお別れする。その後北朝鮮の三合里収容所にて八カ月抑留され、炊事用の薪取りを一台の大人車に四人ぐらい付いて、近くの山へ作業に行きました。

昭和二十一年春五月に日本帰還の声に騙されて無蓋貨車に乗せられて興南港より貨物船にてポセツト港へ上陸し、有蓋貨車にてシベリア鉄道を西へ西へと進行する途中バイカル湖にて水浴するも

寒くて参る。着いた所は中央アジアのアルマータというカザフ共和国の首都なりき。作業は主として住宅用の建設にレンガ運搬やモルタル運び等や農場作業をする。たまにリング園にてリング採集をする。

特に忘れられないのは朝の食事にて当番が汁の中へ小さなダンゴを入れるとき、自分の食器に一個でも多く入れないかなあと期待したのは終生のつらい思い出です。

昭和二十二年五月待望の日本帰還命令が出てシベリア鉄道を東へ東へと進行する。途中チタ駅近くにて大勢の戦友が両手を上げて万歳をしてくれたときは感謝感激にて涙を流す。

六月十三日無事舞鶴港へ恵山丸より上陸する。六月十七日朝九時ごろに我が家へ着くと妹が飛び上がって喜んでくれました。

その後二カ年ぐらい国鉄保線の調査技術掛を勤めました。家事都合により退職し、近くの会社へ入り二十五年勤務し定年退職し現在に至っております。

ます。旧制中学校時代は軍人となるのが夢でありましたが、残念ながら陸士の試験に落ち一時は希望を失した時もありました。

## 地獄の収容所三〇四

愛知県 今井 昭 治

間島（延吉）で編成された第三〇大隊は混成の寄せ集め大隊で大隊長が誰でもこの部隊の将校であつたかも知らない大隊であつたが、炊事班は関東軍経理部東寧派出所の経理課の加倉井軍曹が班長で、炊事班員は関東軍経理部東寧派出所の警備のために大肚子川第五七三一部隊から派遣された兵隊であり、大隊の主体は第三軍関係ではなかつたかと思われる。

昭和二十（一九四五）年十月三十一日ごろコムソモリスクから約百二十キロメートル奥のエバラ湖の近くのドイツ軍捕虜が収容されていた収容所に収容された。

三〇大隊（後に三〇三収容所となる）の作業は伐採と木挽き作業であつた。木挽作業は日本では「木挽き一升飯」といわれていたほどの重労働で